

バウハウス校舎 1926年 ワルター・グロピウス

モダニズム建築の規範的空間

ワルター・グロピウスを校長とする国立バウハウスがワイマールに設立されたのは、第1次大戦直後の1919年である。芸術、工芸と工業技術の統合、その上で建築と生活環境の革新を目指す理念に対し批判がくすぶり、'24年、右翼保守党が議会の多数を占めると危機に直面した。複数の都市から誘致の話があり、工業が盛んなデッサオ市は校舎の建設など好条件を示し、翌年、そこに移ることになる。

だが市の財政は厳しく、産業界は職業学校の併設を望んだ。そこで校舎全体は、バウハウスの研究工房と寄宿舎に職業学校を加えて計画された。当時、バウハウスにまだ建築部門はなく、設計はグロピウスの事務所が担当した。

グロピウスは'14年にファッグス工場でガラスのカーテンウォールを使用するなど新技術に精通し、デ・ステイルやロシア構成主義のメンバーと交流して客観性を重んじ、機能を中心に清廉な建築を求める思想に到達していた。

場所は既成市街地からやや離れ、当時は周辺に畑地が広がる田園地帯。敷地は、南北に走る幹線道路に接し、そこから直角に分岐して東に向かう道路の南北両側である。

バウハウス棟は広い南側敷地で、4層の金工、木工、織物などの工房棟は幹線道路に平行に配置し、東側に離して6層のアトリエ型個室の寄宿舎棟を置き、間に共用の講堂と食堂を納めている。4層の職業学校棟は北側に道路に沿わせ、事務管理棟が道路をまたぎ両校を結んでいる。全体に非対象で権威主義と無縁、有機的で明快な配置である。見方を変えれば円崩し状にL型2棟が立体的に噛合う構成である。2棟を橋渡し、下を通りぬける管理棟の構想は特に秀逸で、外部に動的な空間を生み出した。

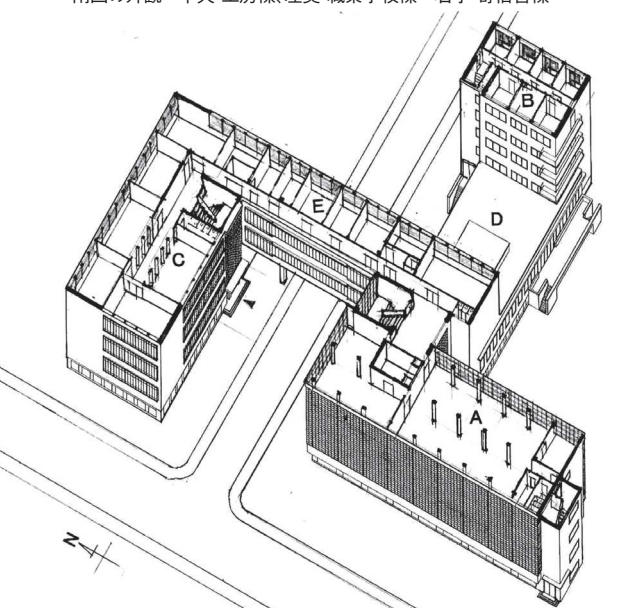
内部空間の特性は、RC造のラーメン架構により外壁は耐力から解放され、工房はガラスのカーテンウォール、職業学校と管理棟は横連窓と、窓形式は自由に設けられ、一挙に明るい室内空間を実現したこと。もう一つは、内部に階段周り以外に構造壁はなく空間はほぼ均質で、部屋割り自由自在にできたことだ。当時では、これは画期的だ。

固有な特徴は、入り口ホールと講堂、舞台、食堂の仕切りを可動にして、繋げば全校参加の「祝祭会場」に設えられること。さらに、両校の玄関入り口は向い合せで、上部の階段部分はガラスのカーテンウォールであり、事務棟の廊下はガラスの横連窓で両方の階段室を繋ぐ関係だ。上下水平の移動空間であり、内部からは校舎と工房を見渡せ、外部からは移動する人の姿が見える。夜は道路をまたぐ大きな門型が明るく浮かび上るだろう。

ここに、以後を方向づける20世紀を代表するモダニズム建築の規範的空間が、初めて規模大きく実現したのである。



南西の外観 中央・工房棟、左奥・職業学校棟 右手・寄宿舎棟



A工房棟 B寄宿舎棟 C職業学校棟 D講堂、食堂 E事務管理棟



左上 2棟を橋渡しする事務管理棟 右上 階段室窓から事務管理棟を見る
左下 工房内部 右下 講堂から舞台、背後が半開きで食堂が見える